慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Tamagawa-Keio-CALTECH joint course on "Neuroeconomics" : 玉川大学GCOE・慶應義塾大学GCOE・カリフォルニア工科大学（9月8-10日 三田キャンパス東館6階G-SEC Lab, 展示スペース)
Sub Title	
Author	田谷, 文彦(Taya, Fumihiko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	Newsletter Vol.14, (2010. 12) ,p.2- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	共同レクチャーコース
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000014-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共同レクチャーコース

Tamagawa-Keio-CALTECH joint course on “Neuroeconomics”

玉川大学 GCOE・慶應義塾大学 GCOE・カリフォルニア工科大学

（9月8−10日　三田キャンパス東館6階G-SEC Lab, 展示スペース）

2010 年 9 月 8 日～ 10 日の 3 日間にわたり、三田キャンパス東館 G-SEC Lab で「神経経済学」をテーマとした共同レクチャーコースが、玉川大学 GCOE・慶應義塾大学 GCOE・カリフォルニア工科大学の 3 校の共催で開催された。本レクチャーコースは、博士課程の大学院生以上の若手研究者を対象に、各講師が研究の背景と最新の研究内容について講義を行うものである。テーマである「神経経済学」は、経済学、心理学、神経科学、認知科学と多岐の分野にわたる研究者が携わる比較的新しい学際的な学問領域であり、海外より 9 名の講師が招かれ、それぞれ 2 時間の講義を行った。

まず、慶應人文グローバル COE 拠点リーダーの渡辺茂教授より開会宣言があり、次いで、前慶應義塾塾長・慶應義塾大学理工学部教授・玉川大学脳科学研究所特別研究員の安西祐一郎氏より挨拶があった。初日は、ケンタッキー大学の Thomas Zentall 博士が “Contrast: The Basis for Several Complex Human Behaviors ‘Cognitive Dissonance’ and ‘Maladaptive Gambling’” と題して、ハトやヒトのギャンブル行動についてコントラストという観点から話をした後、ニューヨーク大学の Elizabeth Phelps 博士が “Emotion, Social Interaction and Decision Making” と題して、感情が社会的な意思決定に与える影響に関する fMRI 実験について、南カリフォルニア大学の Giorgio Coricelli 博士が “The neural basis of depth of reasoning and strategic uncertainty” と題して、戦略的な推論の思考レベルの違いや異なる性質のリスクを伴うゲームついて fMRI による研究の話をした。講義の後には、東館展示スペースで、ポスター発表が行われた。慶應、玉川、カリフォルニア工科大学、京都大学、北海道大学より、50 枚を超えるポスターが出展され、活発に議論が行われた。

2 日目は、米国立衛生研究所（NIH）の Barry Richmond 博士が “When will we act?: Studies into the neurobiology of stimulus-outcome learning in monkeys” と題して、サルの視覚刺激と報酬の関係性の学習について行動データや単一細胞記録のデータを用いて講義を行い、カリフォルニア工科大学の Colin Camerer 博士が “Risky choice” と題して、行動経済学の観点からヒトの fMRI 実験について講義を行った。次いで、当初予定されていたスタンフォード大学の Brian Knutson 博士に代わり、急遽、カリフォルニア工科大学の下條信輔博士が、“Decision making: From Perception to Preference” と題して、眼球運動計測、脳波計、fMRI のデータを用いて情動的な意思決定について話をした後、自由意思について議論を展開した。2 日目の講義の後には、ファカルティクラブにてレセプションが開かれた。

3 日目は、ケンブリッジ大学の Wolfram Schultz 博士が “Neural coding of reward value and risk” と題して、サルのドーパミン系の単一細胞記録のデータやヒトの fMRI のデータを中心に報酬系について講義を行った後、エモリー大学の James Rilling 博士が “Investigating the neural basis of social decision-making in the context of interactive games” と題して、囚人のジレンマや信頼ゲームなど社会的な協調行動が要求される課題を用いた fMRI 実験の話を中心に社会的な意思決定について講義を行った。最後に、デューク大学の Michael Platt 博士が “From Brain to Society: The Biology of Social Preference” と題して、他者に配慮した選好に関するサルの研究や社会的な報酬の価値に関するヒトの fMRI やサルの研究について講義を行った。最後に、下條信輔博士の閉会宣言で幕を閉じた。今回参加した講師陣だけでも、神経経済学の研究に用いられている実験対象や手法が多岐に渡っていることが見て取れる。この機会に、塾内や国内でも学際的な協力関係が進むことを期待したい。

（田谷文彦）

Tamagawa-Keio-CALTECH joint course on “Neuroeconomics” was held from September 8th to 10th at Keio University. Nine internationally invited lecturers gave overviews on this relatively new research field of Neuroeconomics, and introduced their recent findings. The lectures covered a wide range of interests with different methodologies, such as behavioral observations, single cell recordings, EEG, fMRI applied to animals and humans. More than fifty posters were presented, at a poster session held along the lecture series. We hope this opportunity facilitates our interdisciplinary researches in the future.